

## 中島敦「山月記」一考察

——〈名〉について——

杉 岡 歩 美

はじめに

「中島敦」といえば「山月記」。

おそらく、大部分の人はそう答えるだろう。それは、多くの高校二年生向け国語教科書に、「山月記」が掲載されているからである。実際、中島敦の作品中、「山月記」に関する論文の数は群を抜いて多い。<sup>①</sup>「山月記」は、「一九五一年度使用の教科書から」教材化されている。

採用理由として、教員向けの指導書に、「山月記」の提示する問題は、多様であり、かつ、青年期にある生徒たちの胸に強く迫るものである。「生き物のさだめ」「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」「人間性」「自嘲癖」など、生徒にとつて、深く受け止め、考え、自分を省みずにはいられない問題が、次々に提示される。<sup>③</sup>との記載

がある。よって、高校生に向けた授業では、「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」「自嘲癖」といった李徴の性格と、妻子よりも自分の詩作を優先した「人間性」を中心とした読解が行われているといえよう。たとえば、二〇一八年現在管見の限り、一番新しい教材研究論文<sup>④</sup>には、「高校二年になり、生徒は下級生を迎える」。そのことによつて起こった「ライバルの出現」。「そんな彼らに、『山月記』を読むことを通して、李徴に自分自身を投影し、李徴の苦悩や葛藤に共感し、自分自身を見つめ直し、客観化し、自分自身への理解を深めることは、人間的成長を促すには最適の教材である」とあった。

このように、教育現場では、「李徴に自分自身を投影し」「自分自身への理解を深める」指導が実践されている。「李徴」にもたらされた「生き物のさだめ」「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」「人間性」「自嘲癖」といった問題を把握した上で、そうした「李徴」と「自

分」とを結び付け、自らの問題として認識させることを目的としているのである。つまり、教材研究の面では、「自我」「性情」の問題として、「山月記」は認識されてきた。もちろん、作品研究の面でも、「自我」としての「山月記」論<sup>⑤</sup>は主流であった。

そもそも、「山月記」は「虎」に変化する物語であり、唐代伝奇のひとつである李景亮の「人虎伝」を題材としている。ただ、中島が勤務していた高校の入試問題用紙の裏面には、「人間は誰も猛獣使で、それ／＼自分の性情が、その猛獣に当たるとさうだが、全く、ボクの場合、自尊心といふやつが、猛獣でしたよ。(略)ハイエナかジャッカルみたいな奴でね」との書き込みが残されている。従って、元々「人間は誰も猛獣使」というアイデアがあり、その上で、「人虎伝」のあらずじを持つてきたということが考えられよう。

つまり、「山月記」の構想段階で「自尊心といふやつが、猛獣」という発想を有していたことからは、「山月記」の主題がここにあるとわかる。

本稿では、こうした「自意識」という主題については一定の研究がなされたことから、従来指摘の多い〈文字〉や〈言葉〉との関係を再度踏まえながら、もう一つ〈名〉の問題に焦点をあて、考察を深めていきたい。

「山月記」は、教育のなかでは、李徴と自分(読者)とを結び付け読解されると述べた。もうひとつ、李徴と繋げられ、読まれるものがある。

作家・中島敦である。

作家としての評価を受けたのが晩年であり、三十三歳の若さで亡くなったこともあり、詩人として生きたいと渴望しながら虎と化した李徴と、作家・中島敦を接続して考える読みは多い。その中の一人として、狂言師である野村萬斎が挙げられる。

野村は「山月記」「名人伝」の朗読劇を二〇〇五年から二〇一五年までに三回行っている。公演に際して行われたインタビュー<sup>⑦</sup>では、「古典に材を採りながらも「自己とは何か」という、非常に現代的かつ普遍的な、人間なら誰もが避けては通れない問いかけを内包」した中島敦の「山月記」は、コミュニケーション不全に苦しむ現代人の苦悩を見事に描き出している。」と評価し、「承認欲求は人一倍強いのに、他者や世間に向かって働きかけること、その結果傷つくことを過剰に恐れ、自分の殻に閉じこもってしまう」現代人に向け創作したと述べる。また、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という中島敦の言葉は、閉塞的な現代を生きる私たちが、内面に飼う

「獣」の存在を、実在的に表現している」ともあるように、「山月記」の、性情ゆえに人が獣になるという設定から、私たち現代人と共通する普遍的な物語を描出したと考えられる。

二〇一五年版公演概要冒頭には「戦時下の閉塞した状況の中にあっても、開かれた柔軟な精神を保ち、私とは何か」という普遍的なテーマを問い続け、その才能を惜しまれながら早逝した中島敦（一九〇九年～四二年）<sup>⑧</sup>とあり、「山月記」の李徴を、「私とは何か」問い続けた中島敦と積極的に結び付けた様が見て取れる。

そのことを明示するように、野村は劇のタイトルに「敦——山月記・名人伝——」と付ける。

彼は、「山月記」「名人伝」だけにとどまらなくなってしまった。アピールしたいのは両作品の作品論・解釈論ではありません。中島敦という人間自体をテーマにできないかと思ったので、ストレートに「敦」という題になりました。それは、私だけがアイデンティティへの懐疑を持っているのではなくて、今日の日本自体がアイデンティティを喪失していることに目を留めたかったです。<sup>⑨</sup>という。

「中島敦という人間自体をテーマ」にするため、野村は冒頭で中島敦の肖像を背後のスクリーンに大きく掲げ、作家紹介の場面から始める。劇中でも「山月記」以外の作品——「光と風と夢」や、「私小説的」と言われることも多い「狼疾記」「かめれおん日記」な

ど——の二節を引用し、劇を作り上げる。ここでは、作品が作家と接続していく様が視覚化されているのだ。

また、「敦——山月記・名人伝——」劇中、目を引くのは、中島敦に扮した人物が四名登場する点である。野村自身も、「演出上特出すべきところは、やっぱり「敦」という中島敦の分身の存在です。先にも申しましたが、〈中島敦の存在〉がどうしても必要だったからです。私が中島敦を象徴する風貌（丸メガネと七三分けのヘアースタイルと背広）をまとい、「敦」となりました。さらにその同じ風貌をした複数の分身である「敦たち」も同時に存在するという配役設定をしました。<sup>⑩</sup>と述べている。「中島敦を象徴する風貌（丸メガネと七三分けのヘアースタイルと背広）をまとい、「敦」となる演出からは、「中島敦」の「象徴」が記号化している様が見て取れるだろう。

それは、「自己の内面の中にさまざまな人間がいる。そして自分が何人ものという基本構造を中島敦の宇宙観に感じる」<sup>⑪</sup>野村萬斎の解釈が現れたところである。

興味深いのは「敦たち」の存在である。野村の意図はともかくとして、「山月記」という作品世界で、作者である「中島敦」が分裂するといった構造は、「中島敦」という存在自体への問題提起にも思えるのである。「山月記」の作者・中島敦は、一旦作品への署名

を行い、作品から離れると、他者の解釈によって複製され分身となり、流通していく。この点については、第四章以降で述べる。

## 二

さて、「山月記」は《古譚》のうちの一つである。《古譚》は、「狐憑」「木乃伊」「山月記」「文字禍」四作品の総題である。前述したように、国語教科書に「山月記」だけが採用された流れを受け、「山月記」だけが単独作品として読解されてきた。

しかし、指導書においても「これまで教室において「山月記」が「古譚」の枠組みで読まれることはなかった。しかし、「古譚」は文字や言葉テーマにした小説群であり、言語の教育としての国語教育の立場からは、今後「山月記」を「古譚」としての枠組みで読むことが求められる。」<sup>⑫</sup>とあるように、今後は国語教育の場でも、《古譚》の枠組みで読まれる可能性が高い。

《古譚》の枠組みが重視されるのは、「山月記」などの原稿を預かった深田久彌が「古譚」は、シナ及び近東の古い話を題材に採った四つの短篇から成っていた。私はすぐ自信をもって、その傑作を『文学界』に推薦した。当時編集の任にあった河上徹太郎君にもし四つとも掲載不可能なら、そのうちの若干篇でも採用してくれるように頼み、その四つの短篇に私の標準で順番をつけた。たしか

『文字禍』を第一席に置いたと記憶する。河上君も『古譚』の価値を認めて、そのうちの二作『山月記』と『文字禍』を取上げて『文学界』に掲載した。これが中島敦君のデビューだ。『古譚』は好評だった。<sup>⑬</sup>と記した事実からである。中島の創作ノート「ノート第三」に「○つきもの ○木乃伊 ○文字禍 ○人虎伝」と列挙されることから明らかである。

中島の意図を離れて、「山月記」だけが一人歩きしていると捉えるならば、《古譚》のなかに戻しての読解が必要になる。「ノート第三」の「文字と言葉と<sup>⑭</sup>」のメモ書きや、「文字禍」という作品があることから、佐々木充が「一つの特徴として、この四篇が、つねに〈文字・言葉〉をめぐって展開する」と指摘したことには、つまり、「山月記」としてでなく《古譚》として扱う研究は盛んである。実際、「山月記」「文字禍」以外の作品よりも《古譚》としての研究が進んでいる状況である。<sup>⑮</sup>

たとえば、小沢秋広は「古譚」とは、いにしへの語り話の意味だが、敦の「古譚」が狙うのは、伝わってはこないもの「書かれたもののかたわらにあるもの、これが「古譚」のテーマである。」<sup>⑯</sup>とする。このように、〈文字・言葉〉に関する指摘は多い。

ただ、気に掛かるのは看過されがちな「<sup>⑰</sup>」の存在である。

その〈名〉について考察を始める前に、〈文字・言葉〉について

まとめていきたい。

「山月記」は、中島敦の第一創作集『光と風と夢』に収められた。その表題作「光と風と夢」にも〈文字・言葉〉をめぐる描写が見受けられる。「宝島」の作者、R・L・ステイヴンソンのサモアでの生活を描いた作品「光と風と夢」には、彼の口を借りて述べられた文章がある。

満十五歳以後、書くことが彼の生活の中心であった。自分は作家となるべく生れついてゐる、といふ信念は、何時、又、何処から生じたものか、自分でも解らなかつたが、兎に角十五六歳頃になると、既に、それ以外の職業に従つてゐる将来の自分を想像して見る事が不可能な迄になつていた。

其の頃から、彼は外出の時いつも一冊のノートをポケットに持ち、路上で見えるもの、聞くもの、考えついたことの凡てを、直ぐ其の場で文字に換へて見ることを練習した。其のノートには又彼の読んだ書物の中で「適切な表現」と思はれたものが悉く書抜いてあつた。諸家のスタイルを習得する稽古も熱心に行はれた。(略)この書くといふ一筋の道に於てのみは、終始一貫、修道僧の如き敬虔な精進を怠らなかつた。彼は殆ど一日としてもを書かずには過ごせなかつた。それは最早肉体的な習慣の一部だつた。(傍線引用者)

「外出の時いつも一冊のノートをポケットに持ち、路上で見えるもの、聞くもの、考えついたことの凡てを、直ぐ其の場で文字に換へて見ることを練習した。」この書くといふ一筋の道に於てのみは、終始一貫、修道僧の如き敬虔な精進を怠らなかつた。」との文章からは、「見るもの、聞くもの、考えついたこと」は、〈文字〉に「換」える必要があり、〈書く〉ためには「練習」しなくてはならぬといふの認識が呈される。彼は〈視覚〉〈聴覚〉〈思考〉すべてを〈文字〉に換える。「練習」「修道僧の如き敬虔な精進」という語句からは、〈文字〉とそれらとの距離(間接性)に自覚的であつた様子が読み取れよう。

ただし、この作品は、最終的には「口承文芸の語り手」として、南洋の地で死ぬ作家の話であり、単純に〈文字〉の優位性を誇つてゐるのではない。

「光と風と夢」は成立当時、「ツシタラの死」という題名であり、雑誌社の意向で変更されている。原題であつた「ツシタラ」は、作品内において、「ツシタラ(物語の語り手を意味する土語)」と説明される。つまり、「光と風と夢」は、〈文字〉のない世界で、「ツシタラ」として死んだ「ステイヴンソン」を描こうとした作品である。<sup>17)</sup>「光と風と夢」からは、〈言葉〉の世界への憧れと、それでも〈書く〉ことの欲求から離れ得ない西洋人作家の姿が見出せるのである。

この「光と風と夢」に次いで掲載されたのが《古譚》作品群である。〈文字〉と〈言葉〉の間接性、そして〈文字〉への執着、それは《古譚》にも見られるモチーフである。

## 三

「山月記」は次のように始まる。

隴西の李徴は博学才類、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に帰臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に駆られて来た。(傍線引用者)

李徴は「ひたすら詩作に耽り」、「詩家としての名を死後百年に遺そうとした」。詩に拘る人物として設定される。川村湊が指摘した、「妻子への憐憫」よりも、「詩業に没頭」したことを優先してしまつたのが「虎」への変身の原因であり、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という心理的分析に基づくものという「山月記」の主題<sup>18</sup>は作品冒頭から現れる。

李徴の述懐は続く。「己は詩によつて名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。」「詩人として名を成す積りでいゝた。」「一部なりとも後代に伝へないでは、死んでも死に切れないのだ。」と。何回も繰り返し詩への執着を叫ぶように、人間であつた頃の李徴は〈文字〉に囚われている。

一方で、李徴が所属する虎の世界は、〈言葉〉の世界として現れる。「山月記」には「声」が多数登場する。それは、虎としての李徴が、袁愴の前に姿を現した時からはじまる。

残月の光をたよりに林中の草地を通つて行つた時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あはや袁愴に躍りかかると見えたが、忽ち身を齧して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶない所だつた」と繰返し呟くのが聞えた。

其の声に袁愴は聞き覚えがあつた。驚懼の中にも、彼は咄嗟に思ひあたつて、叫んだ。「其の声は、我が友、李徴子ではないか？」袁愴は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かつた李徴にとつては、最も親しい友であつた。温和な袁愴の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたためであらう。

叢の中からは、暫く返辞が無かつた。しのび泣きかと思はれる微かな声が時々洩れるばかりである。ややあつて、低い声が

答へた。「如何にも自分は隴西の李徴である」と。

(傍線引用者)

「李徴の声」(計四回)、「叢中の声」(計二回)、「低い声」「見えざる声」「草中の声」「己の声」「悲泣の声」と幾度も「声」が描かれる。虎としての李徴は「声」になった存在であり、「文字」ではなく「言葉」世界の所属者として登場する。

李徴が虎になることで奪われたもの——ただの人間ではなく、「文字」に囚われた人間にとって——は、「文字」である。

「たとへ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作つたにしよう、と、どういふ手段で発表できよう。」との述懐があるように、「文字」を奪われた李徴に必要なのは、「文字」を記す他者の存在である。

他でもない。自分は元來詩人として名を成す積りでいゝた。

しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至つた。曾て作る所の詩数百篇、固より、まだ世に行はれてをらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつてゐよう。所で、その中、今も尚記誦せるものが数十ある。之を我が為に伝録して戴きたいのだ。何も、之に仍つて一人前の詩人面をしたのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執着した所のものを、一部なりとも後代に伝へないでは、死んでも

死に切れないのだ。袁愴は部下に命じ、筆を執つて叢中の声に随つて書きとらせた。

(傍線引用者)

「これを我が為に伝録して戴きたいのだ。」と李徴は袁愴に頼む。虎に成つてしまつた李徴は「書く」ことから疎外され、袁愴の部下に伝録を頼むことでしか「後代に伝へ」られない。同時に、「詩人としての名」を残すことも、「言葉」の世界に従属する李徴には出来ないのである。

この場面から、「光と風と夢」で見られたような、「言葉」と「文字」との間接性が見て取れよう。ここでは、「言葉」の世界の李徴と、「文字」の世界の袁愴とに間隙が生じている。李徴と、「文字」との間には常に他者が介在しているのである。

袁愴が李徴の詩を聞いて、以下のように評した場面からも、そのことがうかがえよう。

一 読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁愴は感嘆しながらも漠然と次の様に感じていた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、この儘では、第一流の作品となるものには、何処か(非常に微妙な点に於て)欠ける所があるのではないかと。

(傍線引用者)

袁愴は「漠然と」「何処か(非常に微妙な点に於て)欠けるとこ

ろがある」と感じる。この「欠けるところ」が何かについては、研究史において幾度も取り上げられてきた。

〈文字〉を委ねられた他者として袁修を認識するとき、「欠けるところ」とは、つまり、〈文字〉と〈言葉〉との距離だといえまいか。〈文字〉の世界に所属する袁修が「欠けるところ」としか言い得ないのは、〈言葉〉の世界に所属する李徴と、自身に根本的に大きな間隔があるからであろう。話者が〈文字〉の書き手でない時点で、〈言葉〉と〈文字〉は決して一致しないのである。もちろん、それは、〈文字〉の書き手であっても起こりうることである。たとえば、「文字禍」には、「獅子というふ字は、本物の獅子の影ではないか。それで、獅子といふ字を覚えた狐師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙ひ、女といふ字を覚えた男は、本物の女の代りに女の影を抱くやうになるのではないか。文字の無かつた昔、ピル・ナビシユチムの洪水以前には、欲びも智慧もみんな直接に人間の中にはいつて来た。今は、文字の薄被をかぶつた欲びの影と智慧の影としか、我々は知らない。」とあるように、〈文字〉が生む空隙に《古譚》は意識的である。そうした隔たりを実体化したのが、李徴と袁修だと位置づけたい。

また、李徴の〈言葉〉を、「漠然と」「欠けるところ」としか袁修が評価できない点からは、〈文字〉の絶対性は疑われよう。「歴史と

は、昔、在つた事柄をいふのであらうか？ それとも、粘土板の文字をいふのであらうか？」（「文字禍」とあるように、李徴の〈言葉〉が正確な〈文字〉として伝達しえない様子は、書かれたもの・残されたものがすべてではないことを示している。

#### 四

ただ一方で、「光と風と夢」で見たように、〈文字〉の優位性は《古譚》にも疑いようもなく存在する。

「ホメロスと呼ばれた盲人のマエオニデエスが、あの美しい歌どもを唱ひ出すよりずっと以前に、斯うして一人の詩人が喰はれて了つたことを、誰も知らない。」と物語を終える、「世界最初の小説家の誕生についての、一つの個人的な伝説」<sup>⑧</sup>とも評される「狐憑」の存在からもうかがえるだろう。

「狐憑」には「斯うして次から次へと故知らず生み出されて来る言葉共を後々迄も伝えるべき文字といふ道具があつてもいい筈だといふことに、彼は未だ思ひ到らない。今、自分の演じてゐる役割が、後世どんな名前前で呼ばれるかといふことも、勿論知る筈がない。」との文がある。

「言葉共を後々迄も伝えるべき文字といふ道具」との記述があることから、〈文字〉が「後々迄も伝える」手段として捉えられてい



ることがわかる。また、「後世どんな名前前で呼ばれるか」との文章からは「名前」も「後々迄も伝える」手段として認識されていることが読みとれる。

「山月記」に戻すと、李徴が拘ったのは「詩人としての名を成す」ことである。李徴もまた、〈名〉と〈文字〉を後世に伝える手段として把握する。「若くして名を虎榜に連ね」た李徴。彼は、「詩家としての名を死後百年に遺そうとした」「しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる」「己は詩によつて名を成さうと思つた」「詩人として名を成す積りでいゝた」と、詩作と〈名〉を連ねて語る。

「虎」になつた経緯が語られる場面でも〈名〉が関係する。

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊つた夜のこと、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでゐる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中から頼りに自分を招く。覚えす、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走つてゐた。何か身体中に力が充ち満ちたやうな感じで、軽々と岩石を跳び越えて行つた。気が付くと、手先や脇のあたりに毛を生じてゐるらしい。

(傍線引用者)

李徴は「声に応じて」「声を追うて」「声」の招きで、虎に変化する。ここでも〈言葉〉の世界に李徴が溶け込んでいった様子が描き出される。

ただ、ここでは、「戸外で誰かが我が名を呼んでゐる。」との文章に目を向けたい。

「虎」になるきっかけが〈名〉であつたこと、〈名〉が外部にある様子に着目する。李徴自身に帰属し常に同一である筈であつた〈名〉は、「戸外」にある。自身の〈名〉を追う李徴は、虎と化す。この場面では、まず〈名〉が奪われている点に着眼すべきであろう。

〈言葉〉の世界に導かれた李徴は、〈文字〉と〈名〉という、「後々迄も伝える」手段を奪われ、「曾て作るころの詩数百篇」を發表出来ない状態に追いやられるのである。

李徴の〈名〉に関しては、松村良が次のように指摘している。<sup>20</sup>  
「生身の人間としての『作者』と、『書かれたもの』としての『作品』とが、共有する〈名〉において、同一視」される姿が「山月記」には見られ、「実際、李徴にとつては、自分の〈詩〉が自分とは無関係に、そのテキストとしての評価を与えられるものだと、おそらく考えることすらできなかった」とする。

李徴は、「李徴」という名前で「詩家としての名を死後百年に遺そうとした」。つまり、百年後も、「李徴」の〈名〉の元に、李徴自

身が認められると信じている。「李徴」という〈名〉に与えられた名声と個人としての李徴とを単純に結合させ、そこに違和を感じていないのである。

ここで考えたいのは、なぜ、「山月記」には、「李徴」という固有名と、李徴の名声とが完全に一致し、死後も固有名に「主体」が付属すると安易に信じる様が描かれるのかということである。

そもそも、〈名〉が「主体性」を保証すると考えるのは、近代的な観念である。たとえば、出口顯は、以下の通りまとめる。<sup>20)</sup>

だがなぜ固有名詞に個人名を仕立てあげたがるのか。この固有名詞への意志とは何であるのか。これは「汝は誰か」という問いと関連がある。小林康夫によれば、「誰？」という問いに対して最も容易で（とりわけ西洋文明において）唯一可能な答えは「名つまり固有名をもって答えとすることであるだろう」〔小林 1999：378〕。この答えによって、人は自らの固有性や特異性を確保できるかのように思う。つまり、名で応じることによって主体性が保証されることになると思うのである。（略）しかし、そもそも「誰？」という問いかけが不可欠なものであると想定すること自体が、とりわけ西洋社会に特有な極めてロカルなものであるように、主体性のありかとしての固有名詞というのも、そのような問いかけを発する社会に特有の錯覚な

のである。

（傍線引用者）

出口は、「名で応じることによって主体性が保証されることになると思う」のは、「ある限られた社会特有の錯覚だ」と指摘する。

近代において「個」の確立とともに、固有名には「個」が強固に結び付けられるようになる。「山月記」においても〈名〉が「主体性」を保証するという認識が描かれているといえる。「山月記」は近代人として李徴を設定するため、このこと自体に矛盾は見られない。

しかし、「山月記」からは近代的な〈名〉のありかたのみが抽出出来るのではない。「山月記」には、それが過信であることが明示されるのである。

なぜなら、彼の固有名は既に奪われ、「袁修はじめ一行」に李徴の「主体性」たるものは委ねられているからである。たとえば、ここで、袁修の部下が裏切って、自分の名前を署名したらどうなるだろうか。「死後百年に遺」るのはその名前だけである。〈名〉が「主体」を離れたとき、他者に規定されるしかない様が見取れる。

また、『古譚』の一篇である「木乃伊」に興味深い文章がある。

不思議なことに、名前は、何一つ、人の名も所の名も物の名も、全然憶出せない。名の無い形と色と匂と動作とが、距離や時間の観念の奇妙に倒錯した異常な静けさの中で、彼の前に忽ち現れ、忽ち消えて行く。

彼は最早木乃伊を見ない。魂が彼の身体を抜出して、木乃伊に入つて了つたのであらうか。  
(傍線引用者)

「木乃伊」の「パリスカス」は、〈名〉を失い、その結果、「前世に喚起した、その前々世の記憶の中に、恐らくは、前々々世の己の同じ姿を見る」「合せ鏡」に陥る。つまり、ここでは、「パリスカス」が近代的な〈名〉を失うことで「主体」をも失つた姿が描かれたと判断出来よう。

「木乃伊」にも「山月記」同様、近代的な〈名〉が「主体」と結合する様が見られる。そして、その結び付きが瓦解する姿も同時に呈示されているのである。

「山月記」においては、たやすく〈名〉が奪われ、他者に帰属し、「欠けるところ」と評されることで、李徴の「詩家としての名を死後百年」遺すことは不可能になる。このように、「山月記」には、近代的な〈名〉自体への不信が描き込まれたといえよう。

これは、〈文字〉の絶対性を賞揚しながら、同時にその存在を疑うといった構造と同質である。「山月記」のテーマは「文字と言葉と名」なのである。

おわりに

「山月記」は、作家・中島敦と連結し、語られてきた。

その「中島敦」という〈名〉は、いまや様々なものに接続されている。

たとえば、「文豪ストレイドッグス」<sup>22)</sup>というコミックスや、「文豪とアルケミスト」<sup>23)</sup>というゲームがある。最近の〈文豪〉ブームを牽引する作品群だが、このなかには「中島敦」が登場する。特に前者は主人公として「中島敦」を据えている。「彼自身が変身する「月下獣」の異能力保持者」<sup>24)</sup>である「中島敦」の設定は、当然ながら「山月記」をモチーフにしている。このように、中島敦の生誕百周年を迎えた昨今、「中島敦」という〈名〉は、作家・中島敦を離れ、分散し、広がっている。

「詩家としての名を死後百年に遺そうとした」李徴の、〈名〉を絶対視するありかたに懐疑のまなざしを送った中島敦。そんな中島自身の「中島敦」という〈名〉が、「作家・中島敦」でなく、「文豪ストレイドッグス」の「中島敦」、「文豪とアルケミスト」の「中島敦」に接続される現状には皮肉めいたものを感じざるを得ない。

しかしながら、それは、「山月記」に普遍的な問題提起が存在すると示すことにもなるだろう。「山月記」という作品が、長い間国語教科書に掲載され続けるのは、近代以降の人々が感じる「なぜ」を問い続けるからに違いない。本稿では、「なぜ」の一部を考察したに過ぎない。これからも「山月記」について多角的に検討してい

きたい。

注

- ① 管見の限り、「山月記」論文数は二〇〇を超える。そのうち、一〇〇件以上は教材研究論文である。
- ② 大修館書店編集部編『精選現代文B 指導資料1』（平成二十六年四月一日、大修館書店）
- ③ 注②に同じ。
- ④ 黒瀬直美「主体的に学ぶ小説教材の学習指導方法の工夫——『山月記』での取り組みを中心に」（『国語教育研究』第五十七巻、平成二十八年三月）
- ⑤ 山名順子「中島敦『山月記』を読む——時代を見つめる作者の眼（1）」（『川村学園女子大学研究紀要』第二十七巻第一号、平成二十八年）には、いままでの「山月記」論がまとめられている。
- ⑥ 平成十七年に朝日舞台芸術賞、紀伊國屋演劇賞・個人賞を受賞している。翌年再演。そのうち、平成二十七年にも再演。初演はDVD化され、販売されている（平成十八年八月三十日、WOWOW）。
- ⑦ 公演時に配布されたちらしに掲載されたインタビュー。ネットでも公開されている。
- ⑧ 世田谷パブリックシアターによる『敦——山月記・名人伝——』HPより引用した。
- ⑨ 『敦 山月記・名人伝 プログラム』（平成二十七年六月十三日、世田谷パブリックシアター）
- ⑩ 注⑨に同じ。
- ⑪ 注⑨に同じ。
- ⑫ 注②に同じ。
- ⑬ 深田久彌「中島敦の作品」（『昭和文学全集35 中島敦・武田泰淳・田宮虎彦集』月報、昭和二十九年四月三十日、角川書店）
- ⑭ 佐々木充「中島敦の文学」（昭和四十八年六月十五日、桜楓社）
- ⑮ たとえば、諸坂成利「中島敦「古譚」講義」（平成二十一年十一月三十日、彩流社）がある。
- ⑯ 小沢秋広「中島敦と問い」（平成七年六月五日、河出書房新社）
- ⑰ 拙稿「中島敦〈南洋もの〉考——〈南洋 表象と「作家」イメージ——」（『文学・語学』第二一〇号、平成二十六年八月）に詳しく述べている。
- ⑱ 川村湊『狼疾正伝 中島敦の文学と生涯』（平成二十一年六月三十日、河出書房新社）
- ⑲ 野口武彦『日本語の世界13 小説の日本語』（昭和五十五年十二月二十日、中央公論社）
- ⑳ 松村良「エクリチュールの復讐——中島敦『山月記』——」（勝又浩、山内洋編『中島敦「山月記」作品論集』所収、平成十三年十月二十五日、クレス出版）
- ㉑ 出口顯「名前のアルケオロジ」（平成七年九月二十五日、紀伊國屋書店）
- ㉒ 『文豪ストレイドッグス』は作・朝霧カフカ、作画・春河35による日本の漫画作品である。「中島敦」「太宰治」「芥川龍之介」といった文豪の名を冠した登場人物を用いている。平成二十五年四月日に第一巻が株式会社KADOKAWAから発売され、現在までにコミックス十四巻、小説五冊刊行、舞台化もされている。
- ㉓ 「文豪とアルケミスト」はDMM.comより配信されているゲームである。平成二十八年十一月に配信が開始された。『文豪ストレイドッグス』

同様、キャラクターに「芥川龍之介」「泉鏡花」など文豪の名が用いられている。

②4 『文豪ストレイドッグス 公式国語便覧』（平成二十六年十二月二十一日、株式会社KADOKAWA）

〔付記〕 本稿は同志社大学、花園大学、佛教大学での講義の一部を元にした論文である。なお本稿で引用した中島敦の文章は、『中島敦全集』全三巻・別巻一（平成十三年十月十日～平成十四年五月二十日、筑摩書房）を底本とする。原則として旧漢字は新漢字に直し、ルビを簡略化した。

また、文中に現代の判断基準では差別用語とされる単語が存在する。しかし、当時の資料的価値を重視し、そのまま用いることにした。